子から親へのエール論文コンクール 2020
応募用紙

＜応募に際しての注意事項＞

ホームページに詳細な募集要項を掲載しておりますので、必ず内容をご確認ください。

URL http://www.logoo-sk.com/yell

郵送の際は、下記応募欄に必要事項をご記入いただき、論文と同封の上ご応募ください。

1. 個人応募記入欄　（個人でご応募いただく場合はこちらをご記入ください）

氏名	ふりがな		
住所	〒　　ー		
電話番号		メールアドレス	
学校名		学年	年

2. 学校取りまとめ応募記入欄　（学校で取りまとめてご応募いただく場合はこちらをご記入ください）

学校名		担当教員名	ふりがな
学校住所	〒　　ー		
担当教員 電話番号		担当教員 メールアドレス	

1　応募生徒名	ふりがな	学年	年
2　応募生徒名	ふりがな	学年	年
3　応募生徒名	ふりがな	学年	年
4　応募生徒名	ふりがな	学年	年
5　応募生徒名	ふりがな	学年	年
6　応募生徒名	ふりがな	学年	年
7　応募生徒名	ふりがな	学年	年
8　応募生徒名	ふりがな	学年	年
9　応募生徒名	ふりがな	学年	年
10　応募生徒名	ふりがな	学年	年

募集内容　テーマ「仕事や家庭で頑張っている親へ今だから言えるありがとう」仕事や家庭で頑張っている親に対して、泣いたり、笑ったりしたエピソードや親へのエールとなるメッセージを添えて、働き方の多様性を主に家庭の視点から考える論文を募集します。

募集期間　2020年6月28日(日)~11月15日(日)(募集期間最終日の消印有効)

応募資格　県内外の高校生・大学生(専修学校・各種学校生を含む)

規格等　書式自由、文字数1,600字程度とし、冒頭に題名（作品タイトル）と氏名を明記してください。

応募方法　郵送の場合は応募用紙とあわせて下記応募先の宛先へ、電子メールの場合は応募用紙の項目を記載し、下記応募先の電子メールアドレスへお送りください。学校で取りまとめて応募することも可能です。

応募先　郵送の場合：700-0022 岡山県岡山市北区岩田町2-12F-ADIビル3階北 株式会社ログーデザイン内「子から親へのエール論文審査実施事務局」宛
（応募の際は「子から親へのエール論文在中」と朱書きのこと）
電子メールの場合：diversity@logoo-sk.com

各賞授与　岡山県内の大学関係者で組織する審査委員会で、厳正に審査を行います。高校生の部・大学生の部それぞれで入選作品を選出し、その中から「岡山県知事賞」「岡山経済同友会代表幹事賞」「岡山大学長賞」を授与します。また積極的に取り組んでいただいた学校には「ダイバーシティ教育推進学校賞」を授与します。

入選発表　入選された方へ12月下旬に入選・入賞の連絡をいたします。

表彰式　2021年2月に岡山県庁で行います。

賞の種類と副賞

- 岡山県知事賞
- 岡山経済同友会代表幹事賞
- 岡山大学長賞

図書券 **20,000円**

作品発表　2021年2月23日に開催予定の「学生と企業のためのダイバーシティシンポジウム」内での発表等を予定しています。その他、作品集として冊子を作成し高校や大学、その他関係者などに配布するとともに、当実行委員会のホームページに掲載いたします。

著作権　応募作品の出版権及び著作権は、当実行委員会に帰属するものとします。

その他　①応募者の個人情報は、実行委員会が管理し本コンクール実施に関わるやりとりに使用いたします。
②文章作成や応募の際に発生する諸経費は自己負担願います。
③応募書類はすべて返却しません。
④応募作品の不慮の破損や紛失に関しての責任は負いません。

問合せ　ダイバーシティ推進実行委員会おかやま事務局
（株式会社ログーデザイン内）
TEL:086-235-6010　FAX:086-899-6926
diversity@logoo-sk.com　http://www.logoo-sk.com/yell
祝日を除く月曜日~金曜日 10:00~17:00

主催者：ダイバーシティ推進実行委員会おかやま（岡山県、一般社団法人岡山経済同友会、国立大学法人岡山大学）　後援：岡山県教育委員会、岡山県私学協会

過去の受賞作品紹介

その他の受賞作品についてはホームページに掲載しております。
http://www.logoo-sk.com/yell
スマホからのアクセスは QR コードをご利用ください。

2019年度
高校生部門
岡山経済同友会
代表幹事賞
受賞

「頑張り屋のDNA」

千葉県立千葉高等学校１年　　椚山 亜莉沙

「ママはどうしてそんなに頑張れるの？」日頃の母を見ていると、ついそう訊きたくなる。母は幼い頃から厳しく躾られた為、よく「頑張り屋さん」と呼ばれて来た。だから、頑張る事は当たり前で、全く苦にならない。

母は二十八歳の時、日本語講師から大手英会話スクールのスタッフに転職した。初めは営業という慣れない仕事に苦しんだようだが、気付けば関東最大校を任され、海外校に赴任し、最終的には入社三年で、約三十校のスクールを運営する子会社社長に就任した。勿論、悔し涙を流したり、プレッシャーで食事も喉を通らなかったり、眠れなかったりしたこともあるそうだ。しかし、持ち前のバイタリティと負けん気で乗り越え、二百人以上のスタッフを統率し、仲間と会社を盛り上げたと聞いている。退職して随分経つが、今でも彼らと交流があり、母がどれだけ苦労し、頼られ尊敬されていたのか、会話の中から垣間見ることが出来る。そんな母を大変誇りに感じ、私も母のようなキャリアウーマンになりたいと、いつの頃からか考えるようになった。

結婚後も、大好きな家族の為に苦労を惜しまない母。今から十年前、突然、兄が難病に冒された。なかなか微熱が引かない為、近くのクリニックを訪れると、その場で大学病院の紹介状を手渡され、兄は即入院。検査結果は耳を疑うような病名で、母は冷静な判断が出来ないまま溢れ出そうな涙をこらえ、自分よりはるかに大きなショックを受けている兄を懸命に励ました。その日から兄の長く辛い闘病生活が始まった。我が家は父が海外赴任の為、全て母の双肩にかかっていた。どんな時も母は弱音を吐かず、笑顔で接してくれたので、不安を感じることはなかった。兄は再発を繰り返し、母は朝から晩まで兄に付きっきりだった。兄の食欲がなければ、昼と夜の二食を準備して面会。夕方には私の為に一時帰宅し、習い事の送迎をしてくれた。兄の入院で、私が寂しい思いや我慢をしなくていいよう、母が配慮してくれていたのだ。自分の休む時間を削ってでも、私たちの事を最優先にしてくれた母。兄も私も母の大変さは十分理解していたので、それぞれが必死に頑張った。だから、兄の一時帰宅は本当に幸せだった。普段、兄の病室に入れない私は、家族で一緒に居られるだけで、とにかく嬉しかった。

しかし、そんな時間は長くは続かなかった。兄は七年前、誕生日の一週間後、息を引き取った。三年間、一度も涙を見せたことのなかった母が、兄にすがり大粒の涙をボロボロ流し、「丈夫な身体に産んであげられなくて本当にゴメンね。」と何度も何度も謝っていた。葬儀の時は立っている事さえままならず、私は母の側を離れることが出来なかった。抜け殻同然になってしまった母は、毎日を泣いて過ごし、一日中兄の真新しい仏壇の前に座り込んでいる日もあった。初めて見る弱い母の姿に、私もどうしていいか戸惑うばかりだった。

そんな母が、ある日、迷い込んでしまっていた長いトンネルから抜け出られたかのような晴れ晴れとした表情で私に言ってきた。「今まで心配かけてゴメンね。ママ、今日からまた強くなるからね。昨日、お兄ちゃんが夢に出てきたの。『ママ、もう悲しまないで。ボクもう痛みもなくなったし、辛くないよ。いつもママの所にいるから心配しないで。』って言ってくれたの。」と声を弾ませ嬉しそうだ。間違いなく、母はかつての自分を取り戻した。

　どんな事があっても、母は私の憧れであり、目標だ。ただ一つ違うのは、私は結婚しても仕事を続けようと思っている。決して器用ではない私にとって、仕事と家事、育児の両立は難しいかもしれないが、家族の理解と協力を得て頑張りたいと考えている。母の頑張り屋のDNAを受け継いでいる私なら、必ず母のように、いや母以上に頑張れる自信がある。「ママ、私、ママの娘で本当によかった。ママは我が家の太陽なんだからね。これからも私たちを温かく照らしてね。ママ大好きだよ。」

2019年度
大学生部門
岡山県知事賞
受賞

「学ぶ意味」

山陽学園大学２年　林 夏帆

父は「学ぶ」ことをやめない。

10年前から私たち3兄弟を男手一つで育てる父は整体師として働いている。朝ひと通りの家事を行い、日中は仕事をし、夕食を作ってまた夜遅くまで仕事をする。整体師とは非常に面白い職業である。約1時間の間施術相手とコミュニケーションを取り続けなければならない。様々なジャンルの知識を持つ必要があり、相手を不快にさせない聞く能力が必要だ。そのため父の知識範囲は広い。約１か月に１度県外へセミナーを受けに行っては技術を磨き続け、未知の分野への学びもやめない。気づくと、株の勉強をしたり、放送大学へ進学したりしていた。お客さんにとって良いコミュニケーションを取れるように心理学を勉強したりしているようだ。放送大学への進学を決めた時、私はまだ幼く、なぜ大人になり子どももいる年齢で大学に通うのか全く理解できなかった。しかし、今現在大学生となり、学ぶことを行っている身として、父の行動は間違っていなかったことが理解できる。

私は古典文学に興味があり、大学で勉強している。そんな私に父は大学院進学を勧める。しかし、その勧めを私は素直に受け取ることができない。理系分野に進学した人にとって大学院進学とは当たり前の道であることに対して、文系分野に進学した人にとって大学院進学とは非常にリスクが高い選択肢である。また、文学という学問は就職したあと直接使える知識が少ない。加えて、大学院進学者が就職できる確率は低いという。女性であればなおさらだろう。また、文系の女性研究者が生活に困窮し心を病み自殺したというニュースも見た。奨学金を借りて何とか大学進学ができた私にはもうひとつ上の教育機関へ進学するという選択肢はハードルが高いものだった。

しかし、父は学ぶことがどれほど素晴らしいかを私に説いた。高卒で働き、学生時代に勉強することに対してよいイメージを持っていなかったが、40代の今学ぶことが楽しいとも言う。知識とは常に使うものではなく、いざという時に使うべきものだ。知識とは、金と天秤にかけるものではない。終身雇用という制度が崩れた現在、情報をどれだけ収集し時代の波に取り残されないかの方がずっと大事だ。就職という選択肢だけに囚われるなんていうつまらないことを考えるなとも付け加えた。

「がんばったら報われるとあなたがたが思えることそのものが、あなたがたの努力の成果ではなく、環境のおかげだったこと忘れないようにしてください。」これは東京大学の入学式で今年、上野千鶴子さんが述べた式辞の中の一文だ。

私は中学生の時、他人より少しだけ学力が高かった。当たり前のように普通科高校に進学し、大学進学をするか否かではなく、どこの大学を受験するかという選択肢を得た。努力は報われるという言葉を実現させ続け、中途半端な努力をした際は当たり前のように失敗して、20年間の人生を歩んできた。私がこのような人生を歩んでこられたのは間違いなく父がいたからだ。大学進学を人生設計の中の一部に組み込むことに疑問を持たない私を父は作ってくれた。他人と同じように勉強し、同じ道具を使い、同じように学校行事に参加できたという事実の中にどれほど多くの父の努力が詰まっているだろうか。頑張れ、大丈夫、本当によく頑張っているね。このような前向きな言葉をかけてくれた家族がいたことに私は心から感謝している。そして、私はその恵まれた環境のおかげでもう一つ上の教育機関で学ぶ選択肢を得ることができた。この選択肢をどう使うか。

今ある現状に囚われるような人間ではいたくない。たった1度の人生を悔いなく、そして大胆に生きてみたいと思う。そして、他人のために使えられるだけの知識と強さを手に入れる。これが私の学ぶ意味だ。

※所属・学年は応募当時のものです。